

目 次

第13講	第12講	第11講	第10講	第9講	第8講	第7講	第6講	第5講	第4講	第3講	第2講	第1講
漢文(3)	漢文(2)	漢文(1)	敬語(2)	敬語(1)	識別(2)	識別(1)	助詞(2)・副詞の呼応	助詞(1)	助動詞(3)	助動詞(2)	助動詞(1)	動詞・形容詞・形容動詞
.....
62	57	52	47	42	37	32	27	22	17	12	7	2
<hr/>												
付録―文語文法要覧	補講 文学史	第24講 漢文・漢詩	第23講 和歌	第22講 評論	第21講 随筆(2)	第20講 随筆(1)	第19講 日記・紀行(2)	第18講 日記・紀行(1)	第17講 物語(2) 歴史・軍記物語	第16講 物語(1) 作り物語	第15講 説話(2)	第14講 説話(1)
.....
115	111	107	103	99	95	91	87	83	79	75	71	67

第16講 物語 (1) 作り物語

演習問題 A

次の文章は、「あさちが露」の一節である。恋しい齋宮と引き離され味気ない生活を送っていた二位中将は、ある年の師走の夜に清水に近い兵衛の大夫のりただの家に方違えに行き、そこで姫君と出会うことになる。これを読んで、後の問に答えよ。なお、本文の一部に省略がある。

この兵衛の大夫、みめよき娘持ちて、ことのほかに思ひあがり、かしづくなるを、『この殿の渡りそめ給ひし頃も、参らせず』など、いつぞや人の語りし思ひいで給ひて、さすがにゆかしき御心にや、たちよりてかいはみ給へば、葎しんまのすきたるも用意せず、かくれなく見ゆるに、火近くかき立てて、上の衣、下襲がさねなどやうの物なんめり、ひきちらし、さまよふ人々あり。兵衛の大夫が宮みにやとぞ見ゆる。

その中に、主めきたるは、四十余りなるが、のりただが主には、おとなしくぞ見ゆる。また二十ばかりなるが、きたなげなきが、この大人にいとよく似たるは、『これや聞こゆる娘ならん』と思すも、いとすさまじく、させることなき心地するに、ある人「いとねぶたくこそなりにけれ。目さまし侍らん」とて、火を堂の傍に寄せて、折櫃などをとりよせて、火の上に置きなどする者あるべし。

このころざしの物には見も入れ給はず、うちみつけたる頭つき、肩わたり、

この見る人々の中に、あなめづらしと、目も驚かれ給ひて、木繁き夏山の中に、遅桜の一枝散り残りたるを見る心地し給ふ。めかれせずまほり給へば、十五、六ばかりにやあらんと覚ゆる人の、隈くまなき火影はかげに隠れなく見ゆるに、眉、顔など、心にはなる時なき齋宮にぞ、ふと覚え給へる。『のりただが娘などのきははあらず、いかなる人ならん。あまりに思ふ心の通ひて、幻に見え給ふにや、あてに、おはしましけるは』とて、ふと寄らまほしくぞ思し給ふ。させる事なく覚え給ふかいはみの、立ちのくべき心地もせずみたち給へば、主と覚ゆる君、「いまは大殿籠りねかし。まかりてね侍らん。鐘よりさきの勤行もよむばかり」とて立ちぬれば、この人もねぬる気色なり。

(注) 参らせず 〓 ここでは、兵衛の大夫のりただが娘を大切に宮中にも出させないこと。

かいはみ 〓 かいまみ。隙間からこっそりのぞき見をすること。

折櫃 〓 酒の肴や菓子などを入れる、檜の薄板で作った箱。

このころざしの物 〓 省略部分に、姫君に物を差し上げる場面がある。

問一 傍線部①～③の語句の意味として最も適切なものを、それぞれ次の各群の

ア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

① ゆかしき

ア いばつたりしない

イ どんな様子か見たい

ウ 優美なことを好む

エ せせこましくない

オ 由緒正しい

② 覚え

ア 自然に思われる

イ 思い当たる

ウ 思い出す

エ 記憶している

オ そっくりだと感じられる

③ あてに

ア 上品に

イ はかなく

ウ とてもすばらしく

エ なまめかしく

オ 成熟した美しさで

問二 傍線部A～Eはそれぞれどの人物に対する敬意を表しているか。最も適切な

なものを、それぞれ次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。同じ記号

を何度用いてもよい。

ア 二位中将

イ 兵衛大夫のりただ

ウ この殿

エ 十五、六ばかりにやあらんと覚ゆる人

オ 齋宮

カ 主と覚ゆる君

問三 波線部「いまは大殿籠りねかし」の解釈として最も適切なものを、次のア

～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 寝殿にひきこもっていらっしやるのだから

イ 寝殿でお休みになりたがっていることよ

ウ お休みになりたいのでしよう

エ 早く寝てよ

オ お休みなさいませ

問四 「あさぢが露」は擬古物語と言われるジャンルの作品である。同じジャン

ルの作品を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 狭衣物語

イ 松浦宮物語

ウ 宇津保物語

エ 竹取物語

オ 源氏物語

演習問題 B

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

夕顔の遺児玉鬘は母の死後、乳母のもとにいたが、やがて乳母の夫（少弐すけに 太宰府の次官）の赴任にともなって筑紫へと下り、そこで成長する。少弐は玉鬘を都へつれて帰ることを夢見ていたが、それをなし得ないまま任地で亡くなる。その死後、美しく成長した玉鬘に言い寄る男たちは多い。そうした経緯を描いた一節である。

少弐、任はてて上りなむとするに、はるけきほどに、ことなる勢ひなき人はたゆたひつつ、すがすがしくも出で立たぬほどに、重き病して、死なむとする心地

にも、この君の十ばかりにもなりたまへるさまの、ゆゆしきまでをかしげなるを

見たてまつりて、我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまに放れたまはむと

すらむ。あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、いつし

かも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまか

せて見たてまつらむにも、都は広き所なれば、いと心やすかるべしと、思ひいそ

ぎつるを、ここながら命たへずなりぬることと、。男子三人あるに、「た

だこの姫君京に率てたてまつるべきことを思へ。わが身の孝をば、な思ひそ」と

なむ言ひおきける。

その人の御子とは館の人にも知らせず、ただ孫のかしづくべきゆゑあるとぞ言

ひなしければ、人に見せず、限りなくかしづききこゆるほどに、にはかに亡せぬれば、あはれに心細くて、ただ京の出立をすれど、この少弐の仲あしかりける国

の人多くなどして、とざまかうざまに怖ぢはばかりて、我にもあらで年を過ぐすに、この君ねびととのひたまふままに、母君よりもまさりて清らに、父大臣の筋

さへ加はればにや、品高くつくしげなり。心ばせおほどかにあらまほしうものしたまふ。聞き継いつつ、好いたる田舎人ども、心かけ、消息がる、いと多かり。

ゆゆしくめざましくおほゆれば、誰も聞き入れず。

〔源氏物語〕

〔注〕 ことなる勢ひなき人はたゆたひつつ 格別の勢力のないこの人（少弐）はぐずぐずして

いて。

放れたまはむとすらむ 流浪なさることであろう。

母君 夕顔のこと。

父大臣 光源氏のよきライバルで、かつての頭中將。今の内大臣。

問一 傍線部①「ゆゆしきまでをかしげなる」、⑤「いと心やすかるべし」、⑥

「ねびととのひたまふままに」をそれぞれ現代語訳せよ。

問二 傍線部②「我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまに放れたまはむと

すらむ」とあるが、どういうことを言っているのか。人物関係を明らかにした上で、状況がよくわかるように説明せよ。

問三 傍線部③「あやしき所」とは、どこのことか、記せ。

〔

〕

問四 傍線部④「さるべき人」とは、どのような人のことか。その内容として最も適切なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

- ア 将来の夫となるべき人
- イ 玉鬘の将来を予言してくれる人
- ウ 都で待っていてくれる人
- エ しかるべき縁故のある人
- オ 玉鬘のもとをかつて去って行った人

〔

〕

問五 〔 〕に入れるのに最も適切な表現を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア はづかしがる
- イ ゆかしがる
- ウ うしろめたがる
- エ つつましがる
- オ たのもしがる

〔

〕

問六 二重傍線A～C「なむ」の文法上最もふさわしい説明はどれか。それぞれ

次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号は二度使えない。

- ア 係助詞
- イ 終助詞
- ウ 完了（強意）の助動詞＋推量の助動詞
- エ ナ変動詞の語尾＋推量の助動詞

〔

〕